

ベッドに真貴子が後ろ手縛りの不自由な身で上がった。その真貴子の上に麗子がこれも後ろ手縛りの不自由な身を重ねる。母と娘の裸体を密着させたうえで、アナル破瓜の瞬間を迎えさせようというのは、深雪のアイデアだ。弘蔵は、真貴子を寝室に同伴させ、目の前で麗子の後ろの貫通式を行うつもりだったが、深雪の提案に笑みを浮かべて賛同した。深雪の考えどおり、それは真貴子にとって残酷なアイデアで、後ろをこれから貫かれる恐怖に身を強張らせている麗子の痛々しいほどの緊張感が直接に密着した肌を通して伝わってくるのだ。

「麗子の肛門が裂けないようによく濡らしてやりな」

弘蔵の勃起して膨れ上がったものが真貴子の顔に突きつけられる。真貴子はそれを口に含むと唾液をまぶしていく。弘蔵の男根が母の口に出し入れされる光景を間近で見る麗子は、あらためてそのような太いもので貫かれることに恐怖するのだ。裸体のこわばりが真貴子の裸体に伝わる。深雪はいよいよ、麗子のアヌスに埋まっていた張型を抜きだ

すと、真貴子の分泌させている愛液を娘のアヌスにまぶし
だす。

「娘想いの母親だわね。たっぷりと潤滑油代わりの蜜液を
出しているじゃないの」

実際、真貴子はしとどに濡らしており、これから愛する娘
が排泄器官を男根で貫通させられるというのにこのような
状態になっていることに恥じ、自分の淫らな体を呪った。

弘蔵が男根を抜くと、いよいよ後ろにまわる。麗子の裸体
がいつそう硬くなった。弘蔵の手がうつぶせに真貴子に覆
いかぶさっている麗子の腰を抱いたのだ。

「体の力を抜くのよ……」

真貴子は目の前の美しい顔をこわばらせている麗子にそう
言い聞かせる。

「大好きなママからキスしてもらえばリラックスできるさ」
深雪が真貴子と麗子の髪をわしづかみにして互いの顔を寄
せ合う。真貴子は麗子の口を吸った。麗子も吸い返してく
る。

「うぐっ」

キスをし合う麗子の口からくぐもったうめき声が漏れる。いよいよ始まったのだという哀しい思いが、真貴子を激しいキスにせきたてる。後ろ手縛りの体では、これくらいしか母親としてできないのだという思いが、舌を絡めての濃厚なキスに向かわせるのだ。じわじわと亀頭がもぐりこんでいるであろうことは、見なくても真貴子にはわかる。真貴子も弘蔵によって後ろの処女地をささげているのだ。初めて排泄器官を犯されたときは恐怖ばかりであった。麗子もその恐怖から裸体を硬くさせている。

「ひいっ！」

悲鳴が上がる。

「麗子さん、もっとキスしましょ」

真貴子は悲鳴をあげる麗子の口を吸った。緊縛の乳房を押し付ける。後ろから麗子にのしかかる弘蔵の重みが、真貴子の胸を刺す。弘蔵の重みは、ペニスの先端に伝えられ、麗子の菊の花を責めているのだ。

麗子は声にならないうめき声をあげ、口を半開きにしてのけぞった。とうとう貫通したのだ。弘蔵の腰が律動する。貫かれた麗子の裸体はゆすられ、下になっている真貴子もゆすられる。真貴子の瞳から涙が流れ落ちていく。

「真貴子、麗子は見事に旦那様のものをアヌスで受け止めたわよ。母としての祝福の言葉をかけてやりなさいよ！」

「麗子さん・・・おめでとう・・・」

かすれた声でそう声をかけると、真貴子はおいおいと泣き出した。母の泣き声に麗子もまた泣きだす。弘蔵の律動に後ろ手縛りの不自由な裸体をゆすられながら美しい母と娘は再びどちらからともなく唇を求め合うのだ。それだけが救いというように舌を吸いあう麗子の首輪のリード紐を深雪が引きあげる。喉を絞められた麗子は、母の裸体から下され、後ろ手縛りの上体をベッドに埋めたまま尻立ての体勢となる。弘蔵が後ろ手縛りの紐を手にして麗子の上体を引き上げると、腸管を貫いていた男根を口に含ませた。麗子は素直に口を開き、アナルの処女地を奪った男根を含

んで、清める。真貴子は、麗子の後ろに移動させられ、肉棒で貫かれていた麗子のアヌスを見た。壮絶な光景だった。赤子が母乳を欲してピンク色の初々しい口を開けているように、麗子のアヌスはほころびを見せているのだ。もはや菊の蕾ではなく、性交用の器官として開花したのだ。そのアヌスから弘蔵の放った白い精液がどろりと垂れ出ているのが無残だ。

「きれいにしてやりなよ」

深雪が肩を押してくる。真貴子は娘の陵辱されたばかりの排泄器官に口を寄せていった。ザーメンを舐める。激しい抽送に糜爛したアヌスの粘膜を慈しむように優しくなめる。弘蔵が勃起したペニスをゆすって真貴子の傍らに立った。麗子の口で清めさせていた股間は、性交可能になっており、真貴子の目の前で怒張をただれた麗子のアヌスにあてがうと、無造作に押し沈める。道を完全につけられたアヌスは、スムーズに呑み込んでいくではないか。その迎え入れるような結合とは裏腹に、麗子の口から可愛い悲鳴が

漏れる。激しい抽送によってただれた腸粘膜が再びの挿入に痛むのだ。その痛みは真貴子自身が何度も経験している。手に取るようにわかるだけに母親としての胸は張り裂けるように辛く沈痛な思いにとらわれる。弘蔵の勃起した肉棒が激しく出し入れされる。ピンク色をした麗子のアヌスは、真貴子の目の前で懸命に奉仕しているように内部の粘膜をまくれさせながら啞えている。しきりに響く湿った音は、放出されたザーメンにまみれての抽送の激しさを物語っていた。真貴子が顔をそむけようとしても、深雪がそれを許さない。かえって、麗子の拡張され、陵辱されているアヌスに顔を押し付けられていくのだ。

「舐めておやりよ」

舌舐めずりしている深雪は、さらに後ろ手縛りの真貴子の髪をつかんで弘蔵の太いものが激しく出入りしている娘のアヌスに押し付ける。

「舐めるのよ！」

真貴子は舌を出した。麗子の拡張されているアヌスと弘蔵

の結合部分を舐めるのだ。深雪がその真貴子の腰を抱く。
真貴子は舐めながら臀部を掲げた。アヌスにあてがわれたのは、深雪のペニスバンドである。真貴子のアヌスに人工ペニスがもぐりこんでくる。深く突き刺さった深雪のペニスに犯されながら、麗子と弘蔵の交わった箇所を舌を這わし、舐めるのだ。